

新井白石

讀史余論

現代語訳

横井清訳

yokoi kiyoshi



新井白石「読史余論」

常州大学図書館
現代語訳
蔵書章
横井清 訳

講談社学術文庫

横井 清（よこい きよし）

1935年、京都市生まれ。立命館大学大学院
修士課程修了。部落問題研究所、京都市史編
さん所などに勤務したのち、花園大学助教
授、富山大学教授、桃山学院大学教授を歴
任。おもな著書に『中世民衆の生活文化』
『東山文化』『下剋上の文化』『的と胞衣』『光
あるうちに』『中世日本文化史論考』『室町時
代の一皇族の生涯』などがある。



定価はカバーに表
示してあります。

あら い はくせき とく し よろん
新井白石「読史余論」 現代語訳
よこい きよし
横井 清 訳

2012年11月12日 第1刷発行

発行者 鈴木 哲

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒112-8001

電話 編集部 (03) 5395-3512

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

装 幀 蟹江征治

印 刷 株式会社廣済堂

製 本 株式会社国宝社

本文データ制作 講談社デジタル製作部

© Kiyoshi Yokoi 2012 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。なお、この本についてのお問い合わせは学術
図書第一出版部学術文庫宛にお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き
禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化
することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。[R]〈日本複製権セ
ンター委託出版物〉

ISBN978-4-06-292140-4

目次

新井白石「読史余論」

凡例	8
----	---

第一卷

総論 日本の天下の大勢は、九度変化して武家の治世となり、 武家の治世がまた五度変化して、当代にいたったこと	9
--	---

第二卷

古代には征伐が天皇の手で行われたこと	13
中世以来、將軍の職が世襲となったこと	20
源頼朝父子三代のこと	42
北条が代々天下の権をつかさどったこと	103
後醍醐天皇の中興政治のこと	134

第三卷

足利殿が北朝の天皇を立てたこと	162
室町家代々の将軍のこと	198
信長の治世のこと〔天正元年から同十年まで〕	314
秀吉の天下のこと	328
補注	333
学術文庫版へのあとがき	350
解説「徳川王朝」への警鐘	355
藤田 覚	

新井白石「読史余論」

現代語訳

横井 清 訳

講談社学術文庫

目次

新井白石「読史余論」

凡例	8
----	---

第一卷

総論 日本の天下の大勢は、九度変化して武家の治世となり、 武家の治世がまた五度変化して、当代にいたったこと	9
--	---

第二卷

古代には征伐が天皇の手で行われたこと	13
中世以来、將軍の職が世襲となったこと	20
源頼朝父子三代のこと	42
北条が代々天下の権をつかさどったこと	103
後醍醐天皇の中興政治のこと	134

第三卷

足利殿が北朝の天皇を立てたこと	162
室町家代々の将軍のこと	198
信長の治世のこと〔天正元年から同十年まで〕	314
秀吉の天下のこと	328
補注	333
学術文庫版へのあとがき	350
解説「徳川王朝」への警鐘	355
藤田 覚	

新井白石「讀史余論」

現代語訳

凡例

一、『読史余論』（全三卷）のうち、第一卷は総論のみをとり、他は割愛した。第二卷・第三卷は全部を現代語訳した。

一、現代語訳にあたっては、国書刊行会『新井白石全集』第三卷、岩波文庫『読史余論』などをを用いた。

一、文中の人名については、適宜、姓・名を補った。また年や時刻をあらわす干支は省略し、時刻は一刻（二時間）の中間の時刻を便宜上使用した。

一、原本の誤記と覚しき点は、本文中、または補注で指摘した。

一、白石が記入した原注は（一）に、訳注は（一）に入れた。

一、本文中の小見出しは、本来原文にはないが、訳者の判断によって便宜上設けた。

一、『読史余論』の全体の構成、ならびに白石の歴史区分と現在の歴史区分を対比する表を三四八―三四九ページに掲げた。

第一卷

総論 日本の天下の大勢は、九度変化して武家の治世となり、

武家の治世がまた五度変化して、当代にいたったこと⁽¹⁾

武家の治世になるまで

『神皇正統記』によると、光孝天皇の時代以前は、まったくの上古であり、すべての例を考へ合わせる場合にも、仁和（八八五〜八九）以降をいうことになっている。五十六代の清和天皇は幼少であつたから、外祖父藤原良房が摂政となつて政治を代行した。これが、天皇の外戚が権力を専らにした最初である（第一の変化）。

さらに、藤原基経は、天皇の外舅（ここでは母方の伯父の意味）としての力をふるつて陽成天皇を退位させ、代わりに光孝天皇を即位させたので、天下の実権は藤原氏の一手に握られることとなつた。そののち、関白を置いた時代もあれば、置かなかつた時代もあるが、いずれにせよ藤原氏の権勢はおのずから日々さかんとつていった（第二の変化）。

そして、六十三代の冷泉天皇より、円融・花山・一条・三条・後一条・後朱雀・後冷泉の

八代一〇三年間というものは、外戚藤原氏が権力をほしいままにした〔第三の変化〕。

後三条・白河天皇の二代は、天皇みずから政治を行なった時代である〔第四の変化〕。

堀河・鳥羽・崇徳〔白河上皇六年、鳥羽上皇十三年〕・近衛〔鳥羽上皇十四年〕・後白河・

二条・六条・高倉・安德〔後白河上皇三十余年〕の九代九十七年のあいだは、政治は上皇によつて行われた〔第五の変化〕。

後鳥羽・土御門・順徳天皇の三代三十八年間は、鎌倉殿（頼朝・頼家・実朝の源氏三代將軍）が天下の兵馬の権を分掌した〔第六の変化〕。

後堀河・四条・後嵯峨・後深草・龜山・後宇多・伏見・後伏見・後二条・花園・後醍醐・光厳天皇の十二代一一二年のあいだは、北条氏が陪臣（臣下の臣）の身で国の政事を取り行なつた〔第七の変化〕。

後醍醐天皇がふたたび天皇の位についたが、天下の権が朝廷の手中におさまつたのはわずか三年であつた〔第八の変化〕。

その後、天皇は逃亡し、足利尊氏が光明天皇を即位させてもう一人の天皇として以来、天下は長く武家の時代となつた〔第九の変化〕。

武家の治世の変遷

武家は、源頼朝が幕府を開いて、父子三代のあいだ、天下の兵馬の権を握つた。この間三

十三年である〔第一の変化〕。

北条義時よしときが承久じようきゆうの乱後、天下の権を握った。その後七代一一二年をへて、北条高時たかとときの代にいたって滅亡した〔第二の変化〕。その間に、摂家出身せつけの將軍が二代、親王出身の將軍が四代あった。

後醍醐天皇が、いわゆる建武中興けんむのちゆうこうを行なつてのち、足利尊氏が謀叛むほんし、天皇は逃亡した。尊氏は光明天皇を立ててこれを北朝の天皇とし、みずから幕府を開き、子孫がつづいて十二代におよんだ。その間二三八年である〔第三の変化〕。なお、この間に南北朝の争乱が五十四年、また応仁の乱後の一〇七年間は天下が大いに乱れた。実に七十七年間、將軍の武威がおよんでいたかのようなのであるが、東国はみな鎌倉（鎌倉公方）の支配下に属していた。

足利將軍時代の末期に織田家（信長のぶなが）が勃興して將軍を廃し、天皇を差し挟んで天下に号令しようとはかったが、成しとげないうちに〔十年ほどで〕その家臣明智光秀あけちみつひでに殺された。豊臣秀吉とよとみひでよしが信長の故智に学んで、やがてみずから関白となり、天下の権をほしいままにしたのが十五年間〔第四の変化〕。

そののち、ついに当徳川家とくがわの治世となつた〔第五の変化〕。

謹つつしんで考えるのに、鎌倉の將軍が天下の権を天皇から分与されたことは、かつて平清盛たいらのきよもりが武勲によつて身を起こし、ついに天皇の外祖父として権勢をふるつたのがその原因であつた。そして、清盛がこうなつたのも、上は上皇の政治が乱れ、下は藤原氏が代々権力